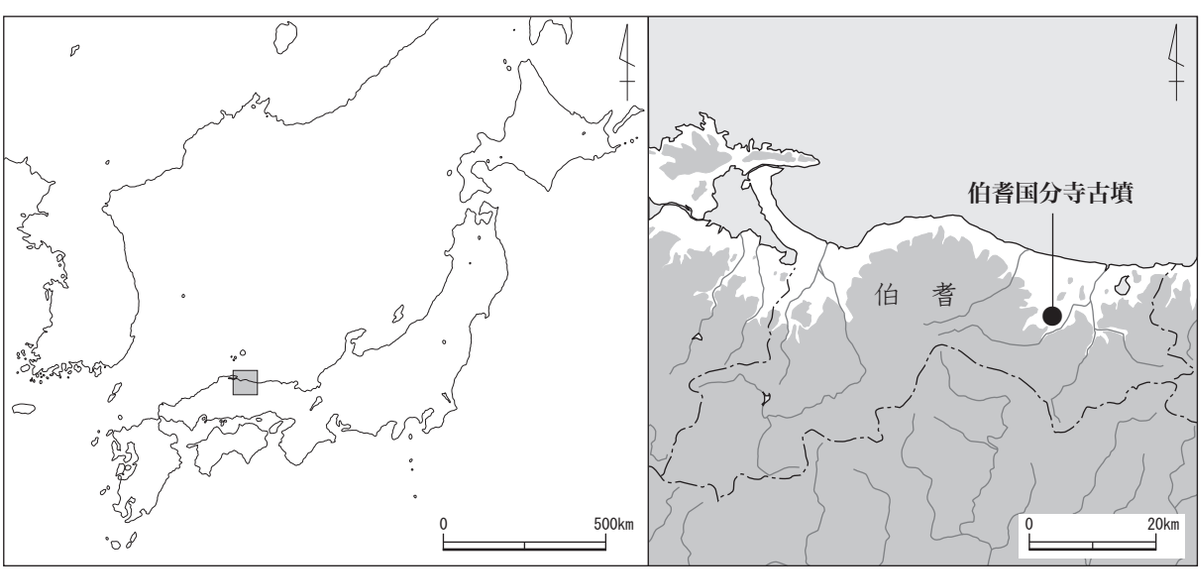
第１章　研究の目的と経過

１　研究の目的

古くに出土したために、十分な検討がなされていない考古資料は数多く存在する。とりわけ古墳に副葬された器物は後世の乱掘などの憂き目に会うことがしばしばあり、古墳時代研究の歩みのなかでも戦前にあたるきわめて早い時期に世に知られることとなった重要資料がいくつもある。そうした資料のうち、当時の帝室博物館や帝国大学の所蔵となった出土品については、学術的に広く活用される機会があり、常に研究上の標識資料として位置づけられてきた。いっぽうで、報告されながらも地方に残された資料のなかには、その後に十分な検討がなされないまま、いまなお実態が十分に把握されていないものもある。そうしたいわば埋もれた資料に再検討を加えて共有化をはかることは、古墳出土品を研究するうえで不可欠な作業であるばかりか、地域における文化財をみなおす動きにつながるきわめて重要な取り組みとなりうる。近年に大きく進展した古墳副葬品の研究成果をふまえ、既出資料を今日的な研究水準からみなおし、あらためて新たな光をあてることができれば、地域における文化財の持続的な保存・活用をうながす効果も期待できよう。

山陰地方においても、そうしたなかば埋もれた資料は少なからず存在する。本研究で具体的な検討対象とする伯耆国分寺古墳は鳥取県倉吉市に所在し（第１図）、三角縁神獣鏡を含む銅鏡３面を出土した古墳として知られる。鏡をはじめとする副葬品が出土したのは 1922（大正 11）年と古く、それにともなって 1923（大正 12）年に調査が実施され、翌年に『因伯二國における古墳の調査』と題する報告書のなかで成果が公表された〔梅原 1924、以下では梅原報告と略記〕。しかし、そこでは副葬品の品目と員数がおおまかに示されてはいるが、個々の遺物がもつ詳細な情報は明らかにされていない。また、古墳そのものについても、山陰における前期古墳としては屈指の規模を誇ると推定されるが、不明な点が多い状況にあって、このことが研究上の大きな障壁となっている。

伯耆国分寺古墳は、副葬品の内容はもちろん、推定される墳丘規模からみても、山陰を代表する首長墓であることは間違いない。地域を代表する首長墓の実態を明らかにすることは、地域の歴史をよ



第１図　伯耆国分寺古墳の位置

みとくうえで不可欠な作業である。いわゆる首長墓が備える諸要素は、当該地域を日本列島さらには東アジアという広域的な視点から俯瞰するための手がかりともなりうる。

伯耆国分寺古墳出土品のなかでも、第一に注目されるのは三角縁神獣鏡である。三角縁神獣鏡は日本列島における広域的な社会関係が形成されたことを実証する、古墳時代のはじまりの指標ともなる考古資料である。山陰のなかでも伯耆国分寺古墳が位置する東伯耆は三角縁神獣鏡が継続的に多くもたらされた地域であり、その背景を明らかにすることは研究上の重要な課題でもある。さらには、伯耆国分寺古墳がいかなる社会背景のもとに築造されたのか、その実態を究明する学術的意義にはきわめて大きなものがあると考える。

こうしたことから本書では、伯耆国分寺古墳出土品について詳細な観察をおこなうとともに、すべての資料について実測図作成と写真撮影による資料化を果たすことを第一の目的とする。とりわけ、個々の副葬品がもつ情報をできるだけ引き出すように努めるとともに、あわせてそれらの系統的・年代的位置を明らかにするために必要な比較検討を試みる。そのうえで、山陰における伯耆国分寺古墳の位置づけを、日本列島の広域を射程に入れた古墳時代社会という枠組みからおこなうこととしたい。

なお、古墳の評価を試みるには、出土品だけでなく、古墳そのものの情報も必要である。伯耆国分寺古墳からは失われた情報があまりにも大きいが、1923 年に作成された記録類が公益財団法人東洋文庫の所蔵する梅原考古資料にあるため、これを再検討することで梅原報告を補足した成果についても提示することにしたい。

2　研究の経過

出土品の二次資料化　伯耆国分寺古墳についての研究活動の発端は 2004 年にまで遡る。当時、個人研究として三角縁神獣鏡について系統的・編年的検討を進めるなかで〔岩本 2008〕、伯耆国分寺古墳出土鏡を熟覧するため、伯耆国分寺に資料閲覧をお願いしたのがすべてのはじまりである。資料との最初の対面は 2004 年 8 月 27 日のことであり、その際に出土品の全容をはじめて確認した。ただし、閲覧が 1 日のみの限られたスケジュールであったため、銅鏡 3 面、鉄鏃 2 点、鉄剣（ヤリ）1 点、方形鍬鍬先 1 点、鉄鎌 1 点、鉄斧 1 点、鉄鉈 1 点、鉄鑿 2 点（うち 1 点はのちに鉈であることが判明）について実測図作成と写真撮影を実施した。くわえていくつかメモ写真を撮影したが、出土品全体を精査するには至らなかった。それでも、伯耆国分寺古墳の副葬品について、それまでに周知されていた情報を補完するだけの情報を得たと判断して、その成果を資料紹介として報告した〔岩本 2006〕。

その後、2013 年に島根大学法文学部山陰研究センタープロジェクト『山陰地方における既掘考古資料の再検討と歴史文化遺産の持続的活用』（研究代表者:岩本崇）を立ち上げ、サブプロジェクト「北近畿・山陰における古鏡集成」を推進する過程において、あらためて伯耆国分寺古墳出土鏡を熟覧することを企図した。もちろん 2004 年時点においても、銅鏡については一定の資料化を果たしていたが、その後のおよそ 10 年間に問題意識や観察視点の深められた部分もあり、2013 年 5 月下旬に再度の資料閲覧を伯耆国分寺に依頼した。あわせて、古墳の築造時期を把握したいと考え、そのほかの副葬品も含めた閲覧申請をおこなった。

閲覧に際しては、当該資料が 1959 年に文化財保護委員会（文化庁の前身）によって国の重要文化財に指定されているため、倉吉市教育委員会文化財課の立会いのもと調査を実施する運びとなった。また、調査対象資料がいずれも脆弱である点を考慮して、2013 年 7 月 6 日に鳥取県教育委員会文化財課もまじえて資料の取り扱いと調査方法について協議することとなった。

協議の結果、鉄製品類についてはいずれも台に綿糸で固定されていたが、調査に際して一時的にこれを外した状態とし、調査完了後に原状復帰することで合意を得て、実測図作成と写真撮影を実施することとなった。したがって、新たに接合関係を確認した資料でも、図上でのみ接合することとし、最終的な収蔵は調査前の状態とした。また、調査中は倉吉市教育委員会の職員の立会いが必要である点も確認された。

なお、一時的に鉄製品の台への固定を取り外すが、それを短期にとどめる必要があることをふまえて、所蔵者である伯耆国分寺、立会いを要する倉吉市教育委員会と予定調整し、調査を進めることとなった。調査方法についての協議をおこなった日を含めて、2013 年７月６・７・15・20・21・22・26・27 日の合計８日間にわたって調査を実施した。調査の実施にご快諾いただくとともに、期間中のさまざまな局面でご高配をいただいた伯耆国分寺の長尾武士氏をはじめとする皆様には篤く御礼申し上げる。あわせて、関係各位のご協力にもあらためて謝意を表する。

さらに、報告書作成作業に着手した 2018 年５月初旬に一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財調査室の佐伯純也氏より、2014 年に米子市内の骨董商から伯耆国分寺古墳から出土した鉄鉇の破片と赤色顔料について寄贈を受けているとのご教示を頂戴した。そこで 2018 年５月８日に資料の実見をおこなったところ、伯耆国分寺が所蔵する資料群との接合関係はないと判断されたが、鉄鉇の構造的な共通性からも同一古墳出土品である可能性が高いと考えるに至ったため、実測図の作成と写真撮影による資料化を実施した。

理化学的分析　一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財調査室が寄贈を受けた赤色顔料は、伯耆国分寺が所蔵する資料群とは所蔵が別であったため、重要文化財の指定対象とはなっていない。そこで、赤色顔料の試料提供を受け、理化学的分析に供することとした。理化学的分析は、蛍光Ｘ線分析と硫黄同位体分析をおこない、前者は島根県教育庁埋蔵文化財調査センターの上山晶子氏、後者は近畿大学理工学部の南武志教授にお願いした。

梅原考古資料の閲覧・検討　伯耆国分寺古墳の遺構にかんする情報と副葬品群の出土状況については、出土後のまもない時点で聞き取り調査を実施し、報告の任にあたった京都大学の梅原末治博士が残した梅原考古資料（公益財団法人東洋文庫所蔵）にくわしい。そこで、財団法人東洋文庫のご協力のもと、2014 年５月 24 日に梅原考古資料の伯耆国分寺古墳にかかわる図面や写真をはじめとした調査記録、書簡など一式を閲覧させていただく機会を頂戴した。

閲覧させていただいた記録類の内容を検討するとともに、すべての記録類や書簡などについて複写を実施し、梅原報告に至る調査所見の形成の基礎となる情報について確認を試みた。

研究体制　以上の経過をふまえつつ、報告書作成と研究活動を効率的に推進するため、分担を異にするメンバーからなる伯耆国分寺古墳研究会を組織した。研究会の構成と役割は以下の通りである。メンバーの役割はそれぞれの研究テーマに応じた内容となっており、個々の専門的見地から伯耆国分寺古墳の位置づけを明らかにすることをめざした。

岩本　崇	島根大学法文学部	資料化・事実報告・鏡の検討・総括
池淵俊一	島根県教育庁文化財課	武器の検討
磯貝龍志	岐阜県文化財保護センター	農工具の検討
髙田健一	鳥取大学地域学部	鳥取県の前期古墳としての検討
小田芳弘	倉吉市教育委員会	倉吉市内の遺跡としての検討
上山晶子	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター	赤色顔料の蛍光Ｘ線分析
南　武志	近畿大学理工学部	朱の硫黄同位体分析

1. 出土品の観察会（2018 年 6 月）

2. シンポジウムの開催（2018 年 11 月）

第 2 図　調査研究の経過

報告書作成までの経過　上述の研究体制の整備をはかったうえで、2018 年 4 月より報告書作成に向けての本格的な作業に着手した（第 2 図）。資料の取り扱いと報告書作成方針についての打ち合わせを経て、研究会メンバーによる出土品の観察会、さらに事実報告内容の確認をふまえて、それぞれの研究成果を総括するためのシンポジウムを開催した。その後、原稿執筆ならびに編集作業を経て、本書を刊行するに至った。

なお、2018 年度の事業は、2016 ～ 2018 年度島根大学法文学部山陰研究プロジェクト『山陰地方における既掘考古資料の再検討による歴史文化遺産の活用と地域還元』（研究代表者：岩本崇）の一環として実施した。

2018 年 4 月 13 日　倉吉博物館にて打ち合わせ
参加者：岩本　崇・根鈴輝雄・小田芳弘・勢村茉莉子

2018 年 6 月 24 日　伯耆国分寺にて出土品の観察会
参加者：岩本　崇・池淵俊一・磯貝龍志・髙田健一・佐伯純也
小田芳弘・勢村茉莉子

2018 年 11 月 17 日　シンポジウム『伯耆国分寺古墳とその時代』の開催（於：倉吉交流プラザ）
「伯耆国分寺古墳の概要」（小田芳弘）
「伯耆国分寺古墳の赤色顔料」（上山晶子・南　武志）
「伯耆国分寺古墳から出土した鏡」（岩本　崇）
「武器からみた伯耆国分寺古墳」（池淵俊一）
「農工具からみた伯耆国分寺古墳」（磯貝龍志）
「鳥取県の前期古墳としての伯耆国分寺古墳」（髙田健一）
「総括」（コーディネーター：岩本　崇）

引用文献

岩本　崇　2006「伯耆国分寺古墳の再検討」『大手前大学史学研究所紀要』第 6 号　大手前大学史学研究所　pp.123-142
岩本　崇　2008「三角縁神獣鏡の生産とその展開」『考古学雑誌』第 92 巻第 3 号　日本考古学会　pp.1-51
梅原末治　1924「因伯二國における古墳の調査」『鳥取縣史蹟勝地調査報告』第 2 冊　鳥取縣